

フラワーソン参加報告

報告書では、参加者から募集した感想文を50本ほど掲載しています。実行委員の梅沢さんと金上さんにも当日の感想を書いてもらっています。これにならって?、自分たちも当日の報告を書きました。

丹羽真一

● 2052 丹羽グループ (1名 / 104種)

初日の16日は留守番役として道新野生生物基金に詰める。参加者からの質問・問い合わせなどに直接対応することになっていたが、ほとんどなくてヒマだった。14:30を過ぎたころから早くも結果がファクスで届き始め、HPの入カシステムからもデータが入り出す。朝、JRの車内でディパックを背負った中高年の一団を見かけたが、フラワーソン参加者ではないかと思ってしまう。

翌17日は、誰も調査をやる人がいなくて空白地だった登別周辺に一人で出かける。ちょっと遠かったが、天気が良くてドライブも楽しい。この辺りはセイヨウオオマルハナバチの「確認空白域」でもあるので、本当にいないかどうかを自分で確かめたかった。登別はふだん通り過ぎるばかりで土地勘がなく、どんなところを回ればよいかよく分からなかったが、地図を頼りに適当に回ることにする。まず、山手に向かってクッタラ湖に行く。ここも来るのは初めてだったが、なかなかの景勝地である。特に珍しい花はなかったが、タニウツギやミズキの花が印象に残った。

登別の市街地に下りる途中で、路傍の花



壇の植え込みが気になる。何という名前かは知らないが、シソ科の園芸植物でいかにもマルハナバチが集まりそうな花である。車を近くの駐車場に停めて見に行くと、エゾオオマルハナバチの働きバチがたくさん訪花していた。少し待ってみたが、セイヨウオオマルハナバチは見かけなかった。近くで咲いていたコナスビ・コメツブウマゴヤシ・ハイキンボウゲなどの名前を記録用紙にメモる。

一気に海岸まで出る。エゾカンゾウ・ハマエンドウの花がすぐに目に入る。クッタラ湖よりも花は多そうな感じた。あちこち



タノウツギ



(ヒメ) オニヤブソテツ

渡辺展之

● 2051 わたなべ 627 (2名 / 34種)

歩き回ると、期待通りかなりの種数を稼ぐことができた。フラワーソンは種数の競い合いが目的ではないが、リストが充実するのはやはりうれしい。登別辺りは山あり海ありで、植物の種類はかなり多い。しかも同じ場所に、シコタンタンポポヤコハマギクのような北方系の植物と、オニヤブソテツやラセイタソウのような温帯系の植物が混在していてなかなか面白かった。

本当は、登別は軽めに済ませてもっと南下しながら調査する予定だったが、ちょっとまじめにやりすぎて夕方いっぱいかけてしまった。セイヨウオオマルハナバチは今回は見つからなかった。

海のあるところ希望で、札幌に近くて日本海側で残っている地区を探すが、海岸線のある地区は人気があってよく埋まっており、その中で一番近そうな「天塩有明」(初山別村)を調査地区に決める。16日に車で3時間かかって調査地区に到着。

最初に海岸線の断崖上の道を歩きながら花を探す。強風だったが、天気は快晴で見晴らし良く、散策していても気持ちいい。断崖上にはカシワ林や自然草原が見られる。ここでは、エゾカンゾウやセンダイハギの花が最盛期だった。場所を変えて砂浜へ移動。護岸などがされて面積は小さいがわずかに砂浜が残っている。数は少なくかろうじて残っている様子だったが、ハマベンケイソウ、ハマツメクサ、ハマボウフウ、ハマエンドウなどの海浜植物の花が咲いていた。

前回の調査では開花が確認されていたスズランは見つからず。特定種の一つでもあるため、見つからないと口惜しいので、海



特定種・スズラン



渡辺 修

● 2050 ぱんかち (3名 / 35種)

岸沿いを探して回る。ほどなくして、海岸沿いにある風衝草原に小さなスズラン群落を見つけることができた。

次に海岸から離れて内陸の森へ移動。日本海型の分布を示すドクウツギを初めて見つける。すでに花は咲き終わっていたが、葉は特徴的だ。その後も見て回るが、この森では開花種数は多くなかった。新しいヒグマの糞も見つけたこともあり、あまり山奥に入ることはやめる。

行ったこともない場所で、深く考えずに決めた調査地区だったが、一つの調査地区のなかに海と森があるので、飽きずに一日見て回ることができた。一方で、田舎といえども、それぞれの環境で、自然にかなり人間の手が入ってしまっていることは少々残念だった。

前ははずっと本部詰めだったため、フワフワ初日は現場を体験しようと家族で行けそうな近場で調査者のいなかった「長都」を選ぶ。しかし車も免許もない人間なので、JR 駅から周辺を歩くしかない……。東の方に行けば防風林があるようだったので、とりあえずその辺に2歳児を連れてウロウロしてみることに。この辺だったらセイヨウオオマルも確認できるかなということも狙いで、捕虫網も持っていった。

娘はアミに喜んでチョウを取れとかいうが、いやいやハチを取らねばと探すか、咲き始めたチシマアザミなどに在来マルハナしかおらず。コンフリーはいそうで期待していたのだが。花もひと段落したようで開花種数は稼げず。前回の記録を見ると、ナニワズ・キツリフネ・オオウバユリなど、開花記録にしては強引である。

川周りもちょっとのぞいたが、人為影響強く大したものなし。エゾノカワヂシャなど。アオダモよく咲いたんだな〜というくらいの成果しかなかった。



花を持たせてみた（本人は虫の方がお気に入り）



水辺のエゾノカワヂシヤ

帰りかてら、自分だけ JR を上野幌でおりて、厚別南緑地などを回りながら帰ることにする。しかし、この辺も林内のメジャーな花はほとんど終わっており、マイツルソウの終わりかけやらオニシモツケのつぼみやらを強引に記録する心境がよく分かった。6月中旬の開催に札幌周辺から不満の声が強くなる理由を実体験した。

戻りながら本部の坂本さんに電話して、中止したグループが2つほどあっただけで持段問題なしと聞き、ひと安心して終了。

2日目は丹羽と交代で本部へ。といってもすることないので、ホームページ関係の

確認など。午後からはポツポツ速報も入り始める。前回のように翌日朝刊に速報と言うムチャ進行ではないので、ファクスとホームページを見ながら入力の準備をゆっくり始める。しかし、今回は予想通りホームページ利用者が多く、速報の結果はどんどん集まる。エンビジョンの田中さんにいろいろ用意してもらっていたので、結果もすぐにランキングや分布図になるので、記事を書くかと思えばすぐに出せたかもしれない。

今後來るファクスは調査館事務所に転送していただくようお願いして戻った。

実施ドキュメント・事務局日誌

渡辺 修

今回事務局を全面的に引き受けたため、準備段階からとりまとめまで、全ての段階に関わることになりました。イベントの運営をどんな感じでやっていたのか、ドキュメント風に紹介してみたいと思います。

● 2006年10月 実行委員会立ち上げ

道新野生生物基金の坂本局長から、前回のフラワーソンの実施体制や資料について確認あり、翌年の第3回のもやることになっ

たので、実施サポートを頼まれる。野生生物基金は局長入れてスタッフ二人体制の上に、局長は2年程度で変わってしまうため、フラワーソン実施時には毎回局長が異なっ